

ドイツ語は苦手なんですよ。学生時代からやっていて、ドイツ語が出来る、という感覚に未だなかったことがない。本もいくつか読んだんです。ミヒャエル・エンデの『モモ』とか、ヘルマン・ヘッセの晩年のエッセイとか、そういえばブレヒトの戯曲も一つ(タイトルは忘れた)読んだ覚えがあります。まあ微々たるものですけど。

どうしてなのか分かりません。とにかく単語が頭に入って来ない(英語に近い形のものとは別として)。それから構文が今一つ自分の言語感覚に馴染まないところがある。

ゲルマン語全体にそういう感覚を持つのかというと、そういうわけではない。北欧のノルウェー・スウェーデン・デンマークの3カ国語にはそういう種類の抵抗は感じない。複雑な変化をするアイスランド語だって、ドイツ語よりは自然な感じがする。

似ているのはオランダ語でしょうか。ドイツ語とオランダ語は似ていますからね。しかしオランダ語はドイツ語ほど触れる機会が無いから、厳密には比べられないのですが。

これって一体どういうことなんでしょうか? かつてドイツ語翻訳をしている人に向かって「ドイツ語がなかなか上達しなくて苦手だ。」と言ったところ、「私はロマンス語系が苦手だ」と言われたことがあります。

もしかすると人によって各言語の得手・不得手というものがあるのかもしれない。もちろんネイティブで、その言語に漬かって生きているなら不得手さなどは克服されてしまう。しかし母語以外の外国語として学ぶときそれは現れてくる、ということがあるのではないか。

ここまでは言い訳です。もっと真剣に勉強すれば克服可能だ、というだけの話でしょう、恐らく。

しかし不得手だからと言って、ドイツ語の美しさを感じたことが無いわけではない。

例えば先に挙げたヘッセの随筆集『雲』(Wolken)に収められた「Föhn (フェーン)」という文章はきわめて美しいものです。ヨーロッパアルプスを吹き越えて来るフェーンについてヘッセはこう述べます。

Am Ende jedes Winters kam der Föhn mit seinem tieftönigen Gebrause, das der Älpler mit Zittern und Entsetzen hört und nach welchem er in der Fremde mit verzehrendem Heimweh düstet.

「毎年冬が終わるころにフェーンがやって来て、その低く鳴り響く音をアルプスっ子は震えと驚きを持って聞かすが、異国にあつては、身をさいなむような郷愁を持ってその音を渴望するのである。」

という一節から始めて、ヘッセはフェーンのもたらす恐れを、特に幼年時代の記憶を描写します。

そして、次のような文章で結ぶのです。

Alsdann, wenn der Föhn verblasen hat und die letzten schmutzigen Lawinen zerlaufen sind, dann kommt das Schönste. Dann recken sich berghin an auf allen Seiten die beblühten gelblichen Matten, rein und selig stehen die Schneegipfel und Gletscher in ihren Höhen und der See wird blau und warm und spiegelt Sonne und Wolkenzüge wieder.

Alles dieses kann schon eine Kindheit und zur Not auch ein Leben erfüllen. Denn alles dieses redet laut und ungebrochen die Sprache Gottes, wie sie nie über eines Menschen Lippen kam. Wer sie so in seiner Kindheit vernommen hat, dem tönt sie sein Leben lang nach, süß und stark und furchtbar, und ihrem Bann entflieht er nie. Wenn einer in den Bergen heimisch ist, der kann jahrelang Philosophie oder historia naturalis studieren und mit dem alten Herrgott aufräumen, — wenn er den Föhn wieder einmal spürt oder hört eine Laue durch's Holz brechen, so zittert ihm das Herz in der Brust und er denkt an Gott und ans Sterben.

「それからフェーンが衰えて、汚れた雪崩の残り雪も溶け去ると、この上なく素晴らしい季節が訪れる。その時、山は麓から山上に向かって一面に、花で飾られた、黄色味があった敷物に覆われて行き、雪の峰と氷河はその上部は清らかにして浄福に満ち、湖は青くまた暖かく、太陽と流れる雲を映し出している。

これら全てのものは、すでに幼少時代を満たしているが、いざとなれば、一生を満たすことすらあり得る。何故ならこれらのものは、声高く、そして絶え間なく、神の言葉を語るからである。人の口の端に上ったことのない神の言葉を。それを幼くして聞いた者には、その後も長い間、その言葉が鳴り響く。甘く、強く、恐ろしくそれは鳴り響き、その魔力から彼は逃れることができないのである。ある人が山の中に住んでいたとして、彼は何年もの間哲学や博物学を学び、古い神様など排除してしまうことは出来るだろうが——ひとたびフェーンをまたも感じ、あるいは雪崩が森を突き崩すのを耳にするや、胸の奥の心臓は震え、彼は神について、そして死について思いを巡らすのである。」

こういう文章を、たとえ苦勞してでも原文で読む、というのは実に幸せな作業です。1語1語噛みしめるように咀嚼していく、至上の読書体験だと私は思う。その経験はAIに代わってもらうわけにはいかないのです。世間でいう実用性とは対極にあるものでしょう。こういう経験を貴重だと思うからこそ、私は多言語学習・多言語読書というものを、たとえ一銭も儲からなくてもやっているわけです。

というわけで、今後もドイツ語とは付き合い続けていくでしょう。今ゲーテの『ファウスト』に取り掛かるのか、と思っているところです。